

巡り合わせの妙―それは電子王国日本の最盛期だった？

郷 勝哉のエレキ人生回顧録

(断りのない限り年号は昭和)

湘南には一年の二学期に転校で入った。逗子小卒業時、優の数が一つ足りなくて湘南を受けさせて貰えず、今なら教育ママと言われそうな母親の指示で芝の正則中を受け、取りあえず？入学した。その後どう計らったか解らないが夏休みに香川先生の面接を受け、結果として湘南には二学期から通うようになった。逗子から横須賀線に乗り、大船で東海道線の列車に乗換えての通学だったが、そこは戦時中のこと、いつも超満員で客車の窓から入ったり入口のステッブにぶら下がるのは普通で、両手で雨樋をつかみ、客車の連結部分にまたがって乗る事もよくやった。空いていた電気機関車のデッキに乗った事もあったが、レール直結のひどい振動がある上、向かい風が凄くて一度で懲りた。中学一年生にとってはスリルのある冒険だったが、今思うと親の知らないところで随分あぶない事をしたものだ。学校生活では転校生でおとなしくしているべきところ、そこは顔なじみの逗子小同期が大勢いたので最初からいた様な顔をしたため、「あいつ転校生のくせにでかい顔して生意気だ」といじめを企んだ者もいたらしいが、葉山に住み一緒に通っていた T 君が陰でかばっていてくれたらしい。小さい時から父が竹鉄砲や木工玩具など作ってくれた影響か、小学生の頃から物を分解したり作ったりすることが大好きで、置時計を何個か分解した覚えがある。庭先に竈を築いて炭を焼いたこともあるが、これだけは一度も成功しなかった。逗子小の時隣家の同級生とその兄貴に教わりながら鉱石ラジオやモーターを作ったり、自宅の並四ラジオを改造してインターフォンでつながる様にしたこともあるが、家人の話し声も筒抜けになってしまいうので怒られ直ぐやめた。この同級生の父上は戦艦武蔵の機関長をしておられたが、戦後になって武蔵のレイテ湾突入で戦死されたと知った。

部活では S 君と A 君と私の三人が物理部 (前身は気象班と理科班) の幹部格で、理科室のツアイス製望遠鏡を体育館屋上に持出し徹夜で星を見たり、日食の時は写真を撮り部費稼ぎのつもりで売ったが、現像液が古かったらしくプリント不良が多くて赤字になった。逗子から藤澤に転居してからだが、自宅と百メートルばかり離れた歯医者の子 (卓球部の後輩) の家を、トランスの巻線をほどこいたエナメル線で結びモールス通信 (トンツー) の実験をしたことがある。電線が細くて電池では電圧が足りないのに、電灯線の百ボルトを利用したが、装置の金属部に触ると感電する物騒なしろものだった。

大学進学後も物理部との関わりは続き、電池や手回し発電機で働く VHF トランシーバーを作り、体育館屋上と江ノ島間で通信実験をしたり、校内放送設備の話が出た時は、メーカー品を買って替わりに自作しようということで、A 君の知人のプロの指導を受けてアンプを製作し、無人状態になる放課後を待ち廊下に電線を引いたり教室にスピーカーを取付ける工事部員の手で行った。スピーカーの箱は不要になっていた下駄箱を分解利用して作ったが、前面パネル

だけは木工業者に注文したものであったので、手作りとは誰も気がつかなかったろう。この放送設備は残念ながら昭和三年の火事で消失した。会報四号の「あまり強くなかった卓球部」では、どういう理由だったか主将で出た事もあったが、試合には弱くてチームの足を引張った。

大学進学はストリートにはいかず、浪人する替りに学制改革で各学年を一度に募集した早大高等学院の三年に入り学部で電気通信科に進学した。結果として湘南中、湘南高、早稲田高等学院(新制高校)の中高全部で三枚の卒業免状を貰った筈だが手元に残ってはいない。学院の時から大学の放送研究会に属し、部費稼ぎにアンプを作って大隈講堂の催事にオペレーター付で貸出した。当時「こんにちは赤ちゃん」の中村八大や、ナベプロを興した渡辺晋などが間近で演奏していたのだが、後日あの様な大物になるとは予想もしなかった。

早慶戦では応援団用にビクター製軍用中古の拡声装置を神宮球場に持込んだが、試合中に度々故障したので交換用の真空管やスピーカーの振動板まで用意し、試合の真最中に半田鰻を握って修理したのも懐かしい思い出。後にプロ入りした選手として広岡、荒川、蔭山、森などがいたが、慶応の方は藤田くらいしか憶えていない。

また研究室では先輩の後を継ぎ無線機を作り、戦後の大学では初めての超短波実験局の免許を受け、ペアの一台は先輩の SF 作家、海野十三も使っていたと言われる実験室に置き、他方を自動車部のトラックに積んで通信実験をした。



卒論もこれを利用し一台は世田谷の NHK 技術研究所のタワーにアンテナを置かせて貰い、他方は千葉の富津海岸に置いて電波伝搬の研究をした。この時、受信レベルをレコーダーで自動記録する必要から無線局の許可範囲外の連続信

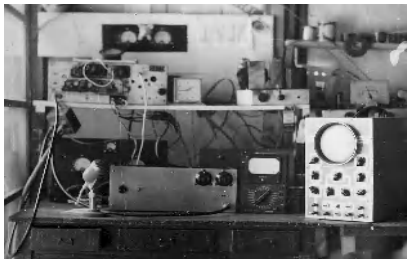
自作電蓄第 1 号



自作 14 型 TV 第 1 号の受信画像



開局当時のアマチュア局 (JA1JK)



号を一週間も発射し続けたため、案の上？監視局に発見され、電波監理局に卒論メンバー一同首を揃えて恐ろしく出頭したが、行ってみると係官は電気通信科やアマチュア無線の先輩達で形式的なお説教と始末書で済んだ。多分その前に卒論指導の研究室教授との間で話が出来ていたのだろう。また研究所の高さ一〇〇メートルのタワーに我々のアンテナを設置するため裸足で登り始めたが鉄ばしごですぐ足が痛くなったので革靴を履いて登ったり、風で半田鋸が冷めてしまつて使えないと解つたものの風よけを用意するのに登り直すのは大変とあり、いぶつて煙が出るのをかまわず持ち合せの手ぬぐいでくるみ(当時は誰でも持っていた)まにあわせたなど楽しい思い出だ。この鉄塔はかなり後まで残つていて技研公開の見学の度に思い出したものだが、平成一四年の新棟建設時に取壊されて無くなった。

在学中は雑誌「無線と実験」「ラジオ技術」などを教科書に秋葉原の部品でラジオや電蓄を作り、それが学資や小遣いになった。テレビの本放送開始(二八年)の一年前にNHK技研から試験電波が出るようになった時は、秋葉原の部品で組立てた受像機を物理部の後輩や近所の人達が珍しがって見に来た。本放送後はメーカー製品も出て来たが一インチ一万円と言われる程高価だったので、郷製作所？のテレビを親類や親父の知人が喜んで買ってくれた。二八年にアマチュア無線が解禁になった時は、朝鮮戦争の払下品の米軍用無線機を改造しJA1JK局を開局した。

NHK 技研の試験放送時代に
早大理工学部が試作した受像機
(秋葉原で入手したオッシロ用
丸型ブラウン管も利用された)

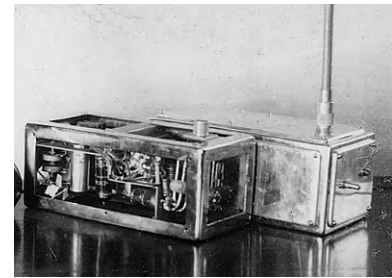


アルバイトとして、朝日新聞社の自動車用無線機を作っていた先輩の会社で写真のような UHF ポータブル無線機の開発を任されたこともあったが、当時の真空管(サブミニエチャ管)ではパワー不足で到達距離が短く、採用にはならなかった。アマチュア無線では超短波帯の遠距離通信記録を六年間保持したこともあったが。

就職は当時民放の花形だったラジオ東京をまず受けたが滑った。次いで時期遅れで募集があったビクターに応募、面接がアマチュア無線で既に顔なじみだった H ラジオ技術課長で話が合ったせい合格した。その年入社した技術系は早大大学院卒の S さん、日大から一人の計三名だけだったが、これが後々大きな意味を持つことになった。当時のビクターは B29 の爆撃で工場が壊滅的損害を受け、資本も東芝系から松下傘下に移り再建が始まったばかりで、大卒を大勢採用する余裕など無かったのだが、そんな事など露知らず、「元はカラーテレビや四五回転レコードを開発し電子技術の神様の様な RCA が戦前設立した会社だから技術は最高だろう」などと勝手に思いこんで受けた。時代は SP レコードからドーナツ盤に移りつつある時で、工場実習では、電蓄のテストにダイナ・ショアの「青いカナリア*」が大音響で鳴り響いていた。最初配属されたのはラジオ技術課で、五〇人足らずの技術者が音響関係全製品、すなわちラジオ、電蓄、それに使うピックアップ、スピーカー他、映写機の音響装置まで設計していた。当時テレビはまだ研究段階で、高名だった高柳健次郎博士が率いる研究部が別にあつた。ラジオ技術課ではラジオの設計からスタートし、LP 専用のアンプやスピーカーの設計をしたが、生産技術的な問題を除けば機器の設計は学生時代に自作していた事の延長だったから、特に苦労した記憶は無い。そのうち映画の疑似ステレオ音響(パースペクタサウンド)の技術導入がありその開発チームに引抜かれ、次いで入社二年後の三一年にテレビ(白黒)の事業拡大に伴い事業部になったテレビの設計部門に配転になった。

*雪村いずみも同曲で有名(共にビクター S 盤)

そこで一四型テレビなど設計しているうちにテレビが米国に輸出される様になり、現地での技術サポートが必要ということでもまず前述の先輩 S さんがニューヨークの輸入販売会社の技術駐在員として派遣された。次いでロスアンジェルスに支所が出来、そこにも必要ということで私が候補になった。当時のビクターでは幹部の海外出張はあっても海外駐在員はゼロで、よほど懸念があつたのか、社長(元海軍大将で開戦時の駐米大使・野村吉三郎)に面接させられ、どうやら「こいつなら会社の体面を汚す事も無さそうだ」とお目がねにかなつたのか OK になり、三六年二月羽田から立った。飛行機は丁度プロペラからジェット機に変わった時で就航したばかりの DC-8 だったが、ロス直行は無く給油のためハワイを経由した。



見送りで驚いたのは、たかが平社員の赴任に前述の高柳常務まで見えた事で、親父があわててVIPルームを手配したのを憶えている。

当時羽田で家族や職場の同僚や上役など大勢が見送るのは普通だったが、ゲートに入る時の万歳には何とも照れくさくて閉口した。今では信じ難いが海外渡航も、それに必要な外貨も政府が制限していた時代だったから大事件？だった訳だ。一方、それに特別プレッシャーなど感じなかったのは、若くて怖いもの知らずだったからだろう。

ロスでの仕事は日本から送られて来た製品の検査やサービスの仕方をアメリカ人に指導する他には、ライバルメーカーの技術や市場情報を報告するのが主だったが、何しろFAXは勿論テレックスも無かった時代だったから、便箋に手書きしてエアメールするというのんびりしたものだった。

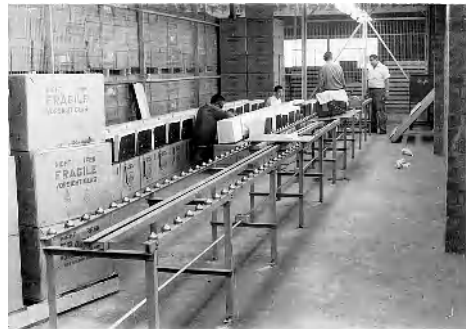
商事会社などが、メーカーの場合日本人駐在員は各社一人が普通で、何事も仲間や上長と相談する事なく一人で判断し行動しなければなら

なかった事で自然に鍛えられた様だ。当時一ドル三六〇円の為替レートが象徴していた様に、日本とアメリカの格差は大きく、片側八車線のハイウェイをびっしり埋めて走る大型車(米国ではスタンダードサイズ)から林立する高層ビルまで、どれもこれも「凄い、日本は何年経ってもこうはならないだろう」と思ったものだ。一ドル三六〇円では中古車を持つことも出来ず、勤務先には下宿から路面電車を乗継いで通ったが、日本では噂だけだったデイズニーランドやハリウッドなどの市内見物には歩く他バスもよく利用した。

最初の任地 D社 LA 支所



倉庫の一部に設けられたライン



テレビは、現地調達のCRTを組み込み、調整や出荷検査などがここで行われた

世界最初のディズニーランド (撮影は1961)



羽田VIPルームで



ある日高級住宅街でバスを降りぶらぶら歩いていたら、変なやつが場違いなところを歩いていると怪しまれたのかパトカーに呼止められた。驚いたがカメラを見せて写真を撮りに歩いていると説明したら笑って直ぐ解放された。その内メキシコ系のワーカーと親しくなり、彼のポンコツ車に同乗して白人や観光客など来ない大衆向きナイトクラブにメキシコ民族音楽(マリアッチ)をよく聞きに行った。彼は車はあっても家族持ちで小遣に乏しい一方、こちらは車は無いが二人分の飲代(多くて十ドルくらいだったと思う)くらいは払えるという関係で、あちこち一緒に遊びに行った。

僅か六ヶ月のロス駐在後、今度は任期満了になった S さんの後任としてニューヨークに移動、日本からキットで送られてくるステレオ電蓄や白黒ポータブルテレビの現地組立てを指導、その内カラーテレビも加わり当時それしか無かった丸い画面の RCA 製二インチカラーブラウン管を組込んだが、アメリカでもカラーテレビは金持しか買えない高級家具だった。そうこうしている中に VISA 滞在期限の一年が来て三十七年三月ドイツ経由で帰国した。当時 D 社がドイツから輸入していたステレオのキャビネットは、日本ではまだ実現しなかったぴかぴかのポリエステル塗装でその高級感がアメリカ人に受けた。そこでビクターも追従しようとしたが、塗料は輸入できても塗装方法が解らず困っていたので、帰途そのキャビネットを作っているミュンヘン郊外の工場に行き、ポリエステル塗装のノウハウを持帰れということだった。体の良い産業スパイの様な役目だったが、D 社に高級電蓄を納めているメーカー、すなわちそのキャビネット工場にとっては親会社の紹介ということと、自分達が得意の塗装技術を日本人が教えを乞いに来たという面もあった様で歓迎され、塗装設備の写真撮影も自由に、ノウハウでもある研磨材なども喜んで分けてくれた。また英語で意志疎通が出来るか懸念があったが、そこは若くて美人の社長夫人が通訳をしてくれ助かった。その帰途、当時松坂貿易の駐在員としてデュッセルドルフにいた N 君(故人)とチューリッヒで落合い、週末にマッターホルンでスキーを楽しんだのも、もう語り合えない思い出になってしまった。

帰国した三十七年は国内の白黒テレビが爛熟期に入るところで、古巣の職場は呼びでなく戻れなかった。一方、ステレオが売れ出し大和に専用工場の建設が始っていた。この事業展開から今度はオーディオに転身してステレオ技術課長ということになった。この頃、山水、トリオ、パイオニアの通称オーディオ御三家はまだ台頭前で、ビクター、コロンビアが先頭を切っていて、新装の大和工場では業界のカリスマ的存在だった S 事業部長に率いられた家具調のステレオを作っていた。時代は真空管がトランジスターに置き換わりつつあり、ビクターではラジオはトランジスターだったが、「石は音が悪くて駄目」というカリスマ事業部長の考えでステレオはまだ真空管だった。しかし根が新しいものの好きの私は「その中ステレオもトランジスターになるに違いないから、一モデルで良いから作らせてくれ」と説得し、業界初のオールトランジスターステレオを開発した。しかし事業部長が言っていた通り真空管特有の柔らかな音にならず、

価格も高かった故か売行きは限定的だった。新しもの好きが成功したこともあり、プリント基板を採用し、手作業の半田付けに替る自動半田付システム（フローソルダー方式）を会社として初めて導入した事もある。

好事魔多しというのが失敗もあった。五球スーパードという呼び方があった様に当時は真空管の数が機器の性能を代表していたが、ある時真空管メーカーから「一球少なくても今まで通りの性能が出る」という触れ込みの真空管シリーズの売込みがあった。これはコストダウンになると言うわけで、値下げを迫られていた輸出向けステレオに採用した。しかし、試作時は所定の性能が出たものの、いざ量産してみると FM の感度不足が露呈した。この対策にじたばたしている中に、仕向先である米国 D 社の納期に間に合わなくなり、やむを得ず生産途中でシャシーをそっくり旧型に戻す羽目になった。当然の事ながら、コストダウンどころか中止したシャシー分の損失が出た。事業部長からは直接お咎めは無かったが、間もなくヨーロッパ技術駐在員としてイタリアに派遣された。

問題の真空管には後日談があり、二回目の米国駐在の時 D 社の相棒から「あの真空管では多くのアメリカメーカーが失敗した、お前だけではなかった」と慰められた。

ヨーロッパではミラノを拠点に、数カ国にあった代理店の技術サポートをする傍ら、新製品の現地テストやスイスのベンチャーが開発したジュークボックスの技術導入などに携った。四ヶ月の短い駐在だったが、この時の経験は、後日のヨーロッパ出張や、定年後のスイス、オーストリアを車旅行するのにも役立った。

帰国してからしばらくは待機のような形で貿易部の仕事をしたが、四二年にデミング賞の流行？で品質管理が盛んになり品質管理課長になった。しかしこれも長続きせず、四三年「あいつなら海外経験の他、テレビ、オーディオ、品質管理の事まで知っているから適任」と思われたのか、ニューヨークに設立する現地法人の技術担当役員として引抜かれた。役員と言っても日本では工場の一部長格だったが、米国業界で競争力のある製品開発を事業部にリクエストして仕入れるという立場から事業部長や技術部長と折衝することも多く、「自社の経営を外から知る」意味で勉強になった。（八ページに続く）

普通ならこの役も数年で交替し帰国する筈だったが、四チャンネルレコード方式 (CD-4) が開発され、その原盤制作を目的に設立された小さな会社の社長兼ライセンス担当として五〇年にロスアンジェルズに転任した。湘南の時は英語は嫌いな方だったが、延一〇年の米国勤務中、会話だけでなくビジネスレターのやりとりで自然にビジネス英語が身についた。私が一寸おかしな英語を書いても察しが良い秘書が理解しタイプするとき旨く直してくれ安心だった。またその時 K 先生にたたき込まれた呪文? の様な文法が立派に通用し、あれは先生独特のノウハウだったとか、中学時代の基礎の大事さを改めて悟った。加えてロスでは原盤カットイングとライセンススマネージメントの傍ら、研究所の研究論文をプロオーディオ (放送やレコード) の学会に代行発表する役目があり、アメリカ人エンジニアの助けも借りて技術英語を身につける結果になった。

「こぼれ話」 ハリウッドの娼館

このロス勤務中おかしな経験をした事がある。海外の出先機関には本来の業務の他に日本の本社から様々な依頼が来るものだが、中で一番多いのは会社のお客の観光案内である。ニューヨークのある貿易商社では、どの程度の接待をすべきかその都度悩まないよう、接待のレベルをクラス分けしてあり、本社から「今度行く客は B で接待せよ」などと暗号指示が来るといふ話もあった。関連だが、当時はエンパイアステートと自由の女神には必ず案内する習慣で、商社の駐在員はエンパイアに百回行く頃、米国勤務が終り日本に帰国するということから「エンパイアステート百回クラブ」という会もあったそうだ。メーカーではそれほど頻繁ではなかったと思うが、何れにしてもこういう仕事? は営業マンがするのが普通だった。しかし私の会社は研究所の出先のような性格から技術者が主で営業はいなかった。そこへ国内営業から「静岡の量販店 S 社の成績がトップだったので、その褒賞として社長と専務にアメリカ観光旅行を提供することになった、ついでにはロスアンジェルズの案内を頼む」と言ってきた。

S43 年の赴任当時はまだ無かった
N.Y. の目抜き広場 Times Square
の JVC ネオン (この撮影は S59 年)



当時 Times Square の広告一等地を
占めていた CocaCola のネオン



そこ迄ならデイズニールランドとかユニバーサルスタジオ(日本にも出来たテーマパーク)を案内すれば良い簡単な話だったが、驚いたのは続いて「その社長の特別の頼みで白人の女も…」とのリクエスト。これには困り、仕事で関係が深い RCA のスタジオマネージャーに相談したところ、さすが蛇の道は蛇で「お易いご用、レコードアーティストの接待に時々使っている所があるから、そこへ電話しておいてやろう」と住所を書いてくれた。

さて当日、まだ明るい中だったが、相談役のベテラン二世と一緒に問題のお客様をホテルで拾い、ハリウッド裏手の高級住宅街の住所を探し当てたところ、売春買春とも禁止の国だから当然だが表札は勿論それらしい雰囲気は全くない大邸宅だった。ドアを叩いたら女主人らしいのが笑顔で現れ「話がよく解っている」とばかり広いロビーに案内された。その内濃い化粧の若い女が五人ばかりぞろぞろ現れ、二人のお客さんはその中の二人を選んで二階のベッドルームに消えた。これが知られざるハリウッドの娼館だったのだが、こちらは役目柄ビルも遠慮して、同行した二世と女主人と三人でコーヒーを飲みながら雑談して事が済むのを待った。やがて社長の方は満足げな顔で戻ってきたが、若い専務の方はきまり悪げに「旨いかなかった」と一言。初めての白人ガールとあって、張切り過ぎたのか気後れしたのか、熱海で芸者を抱くようにはいかなかったらしい。帰途ビバリーヒルズのグッチの店に寄り、「奥様のお土産に」と札入れを買って差上げた。そう高価なものではなかったのだが、当時日本では入手困難だったグッチというわけで奥様がとても喜んでくれたそうで、後日わざわざ営業を通してお礼が来た。こちらはグッチより例の娼館を思い出してしまったが。

CD・4 はそれなりの音響効果はあったが、新音楽媒体としては受入れられず、会社は次の大事業の VHS ビデオに注力するようになり、私も二年後の五二年には用済みで日本に引揚げた。しかし CD・4 の海外展開は「JVC は新しい技術に挑戦する日本の会社」(あるヨーロッパメーカー役員のコメント)として認知される事になり、後の VHS ビデオの世界展開の地ならしになったと思う。

四十三年からの二回目の駐米は九年間だったが、この間現地校に通った子ども達にも後日プラスに作用した。帰国直後はおかしな日本語をしやべる問題で親を心配させたが、学校の成績を英語で稼ぎ、就職後も「英語に強い」と上役に頼りにされたり武器になった様だ。元はと言えば中学校までのこどもの英語だったのだが。

帰国後はしばらく研究所のサポートを務めたが、六〇年に外国特許担当部長になった。多分オーディオ・ビデオ技術など一通り知っていて技術英語にも強いからという理由だったろう。平成二年にこの外国特許部門で定年を迎えたが、時代の流れで政府の定年延長推奨と、退職者のノウハウが韓国メーカーなど他社に流れない様にとという業界の懸念も背景にあったのか、社内対象の①技術コンサルティング、②研究・開発受託、③外国特許出願及び技術翻訳を目的とした子会社が設立され、③を私が受持ち五年間務めた。

これまでを振り返ると、民生用エレクトロニクスのハイライトはラジオ・電蓄から、テープレコーダーやステレオ、白黒テレビ、カラーテレビ、VHSビデオと変遷し、市場は日本国内から米国・ヨーロッパ・中東へと進展、その基幹部品は真空管からトランジスタへ、トランジスタから IC と変っていった。

この様なエレクトロニクス産業興隆の時代に居合せただけでなく、会社の拡張に合わせて次から次と声がかかったのは、何と言っても入社時(学卒では)たった三人の技術系社員で、他にいなかったからだろう。これが東大出が(多分)ひしめいている東芝、日立、三菱のような大メーカーだったから、こうはいかなかったに違いない。また日本メーカーの米国進出で RCA、GE、マグナボックスなどの名門が業界から蹴落され、その後、車や半導体摩擦で日本メーカーへの風当たりが強くなり、白い目で見られそうになった頃にはもうアメリカをさよならしていた。

ボーナスも初めの頃はフランク永井や岩崎宏美など売れっ子歌手達が稼ぎ出してくれたし、後年は VHS がそのライセンス料として稼いでくれた。その後デジタル技術時代になり変化を追うのが大変になった頃には定年になり VHS の最盛期も過ぎ、稼ぎが減るどころか会社自体が衰退し、開発途上国にも追上げられ遂に他社に買収される羽目になった今では、例え「こうなったのも先輩達のせいだ」と後輩から恨み言を言われても「何しろ二〇年以上も前の事で時効にしてください」と言うしかない。

何れにしても「ラッキーだった我がエレクトロニクス人生！回り合せの妙」と言う他ない。同じ回り合せでは、三七年湘南の後輩達のグループに誘われたスキーで女優の誰かに似たチャールミングな女性に遭遇、一男一女をもうけ、最近三人目の孫も出来た。

その女房曰く「あなたはラッキーだっただけでなく、根が楽天的だから・・・」。

了

今でもオーディオ
マニアが珍重する
Western Electric 300B



Bel Lab のトランジスター発明後、その親会社の
Western Electric から最初に発売された
A1729 (シンボルの右下)

